

仏法は内心に

「一。王法は額にあてよ、仏法は内心に深く蓄へよ、との仰に候。仁義といふ事も端正ただしくあるべきことなる由に候。」（御一代記聞書）

火鉢と灰と火

池には水、火鉢には火、人には信心とは、何時もく私のよく言う譬である。私は夏でも、私の部屋の火鉢に火を入れて、湯をわかしている。そうしないと部屋がおちついて来ない。

火の無い火鉢、灰がよごれて、湿って、灰に塊があつたり、紙やら木片やら、煙草の吸殻やらが乱れている火鉢ほど感じの悪いものはない。火鉢の灰に唾を吐いたりするのはもつての外である。

台湾の籾殻から製造した白い灰、内地の牡蠣灰、石綿の灰、藁灰、よくふるいでおろした灰、そうしたきれいな灰の中に、火が埋められて、灰がきれいに均ならしてあるのは、快いものである。

しかし、如何に火鉢や灰がきれいでも、火が無い火鉢は、魂のぬけた人間と同一である。

我という火鉢の体や灰をきれいにする、「王法は額にあてよ……仁義といふ事も端正ただしくあるべきこと」、それは、人間として、国民として当然あらねばならぬことである。

しかるに、もし、形だけは何とか世間の仁義を守るようでも、心の灰の中に、蛇がいたり、ミミズがいたり、石ころがあつたりして、火がないならば大変である。形の上で美しくしていればいるだけ、偽善であり、ゴマ化しである。最後の日まで信用出来るものではない。信念のない善人は、時により事によれば何をするかわからない。だから蓮如上人も

「一。同仰せられ候、『世間にて時宜然るべきは善き人なりと雖も（世間のことにかけては、才があつて、時により問題によつて上手に裁いてゆく人のこと）信なくば心をおくべきなり、便にもならぬなり。たとえ片目つぶれ腰をひき候ふようなる者なりとも、信心あらん人をば頼もしく思うべきなり』と仰せられ候。」（御一代聞書）

まことにこの通りである。念仏のない人はもちろんのこと、念仏するようでも、その信心に不徹底な所があり、不純分、自力が混入していれば、最後まで頼りになるものではない。必ず心を許しきることは出来ない。私はもう世の中の才子というものには懲りた。信心の問題よりも、仏教的活動？に熱中しようとする人さえ、問題の度にお別れとなる。

灰の中の火、心の中の聖火、その信心が、常住不滅、無量寿、無量光の本願力さながらの信心でなければ、決して一貫しない、最後まで力にはならない。

「仏法は内心に深く蓄へよ。」

灰の中の火、底知れず、わずかに見える火、仏法もまたかくの如くあるべきである。

内より外に

火鉢に火を入れても、その火が火鉢や灰を浄化はしない。しかし内心に燃える信の火は、身心そのものゝ上に光らないではない。世間の道、国法王法はこれを教え知らしめ、作法は習慣になるまで仕込まねば出来はしない。しかし内なる信火は、それを真実に成就する力と方向を持つておる。

人間的に善人であり、仁義が正しい人であるが為に、かえって家庭を冷却せしめ、家族を泣かしている人がある。あるいは、一世を憤つて、人生に反逆して死んでゆく人がある。信心の火がなく、仏心によつて柔軟心を成就せぬがためである。

形の上で王法を守り、仁義の正しい人が必ずしも信心の人ではないが、信心の人は必ず忠良真実なる国民となり、孝行な家庭の人となる。私はかつて、真の念仏行者にして、不孝者、不忠者、家庭を闇にする人を見たことがない。もしありとすれば、その人に借すに時をもつてすればわかる。信心も念仏もない人になるか、あるいは一家の人を動かして、家庭の燈明台となるか。二者その一となる。

信の生活

「私はこれほど念仏に精進しているのに、家庭の誰も認めません。仏法を聞いても、お前は善くならんから駄目だと言われます。」

よい葉である、信仰のない夫は、妻や、子供が一席でも聞けば、すぐその場から、生まれ変わった善人になるように思つて、聞く人を責める。しかしそれは聞く人にとつてはよいことである。

一月や二月で認められもすまいが、一年たち、二年たつても、夫も認めず、妻も頭を下げない、親も感動しない、子も動かない念仏がありとすれば、それは決して不滅の信火が灰の中に燃えているのではない。自力我慢が、内心に仏法を深く蓄えないで、灰の上に信の字、火の字を書いているのである。信の字と、信とは違う。仏ばなしを聞くのと、仏の教命を聞くのとが根本に違うように。火鉢の中に火が入り、電燈に光が点れば、誰にでもわかる。毎日一緒に住む妻の心中に、お浄土の信火が不滅に燃えはじめたのを、三年たつても夫が知らないはずがない。

仏法は、灰の上に書いた文字ではなくて、灰の中に埋められたる不滅の火である。清浄真実を体徳とする生きた心である。この信火、三毒の煩惱を自然に消滅し浄化する。そこに、信は生活の上に顕現して行となり、人生における具体的事実となる。

願心と軌道

念仏の子は頭を大地につけ、合掌して生きる。たとえ千年仏法を聞くと、内心の我慢自力の氷、仏智によつて融けず、懺悔なく、合掌なく、感謝なく、恩を知らず、報謝の生活なくば仏法ではない。

内心深く蓄えられたる仏法、内心深く燃えてやまぬ信の火は、必ず合掌して王法を額にあてて頂く、こゝにおいて世間の道に生命が流れる。世間の仁義が、自然の相となる。

もし世間相對の道を軽んじ、これを無視するならば二乗である。汽車はレールの上を走るが如く、すべては因果の軌道を走る。親の病も、同僚の迷惑も、一切を無視して、仏法を求めるときに走りまわる子、一度や二度は許されよう、後には必ず行詰りが出来て動けなくなる。それは又、内心何もこれを碍げ、これを滅することの出来ない熾烈なる願往生心のない人と共に、真実の菩薩道に生きる人ではない。

千里を歩む象も、これが眠っている限り犬にも劣り、この足に釘一本がたつて、これを痛めたならば、千里の歩行も不可能である。象よ覚めよ、しかしてその足の釘をぬけ。

熾烈なる願心よ内に燃えよ。差別相對の世界を無視するなかれ。

外儀は仏法

和讃に聖人のいわく、

「五濁増のしるしには、この世の道俗ごとごとく

外儀は仏教のすがたにて、内心外道に帰敬せり。」

聖人の御悲歎は、今の世においてますます深く深きを憶う。

外儀は仏教のすがたにて、内心外道に帰敬せり、内心名利に帰敬せり、内心五欲享樂に帰敬せり、悲しむべし。歎ずべし。滔々たる天下の有様。

火鉢の灰に火なくして、誰かこの火鉢に近づこうう。一村一部落の火鉢となれる寺院、百千中、果していくばくなる。両聖の教誡、頂戴すべし。仰ぐべし。